

姚瑩における桐城派への所属意識について

浅井邦昭

はじめに

「桐城派」の名は、曾國藩「歐陽生文集序」（『曾文正公文集』卷一）にすでに見られる。その序では、姚鼐の高弟として管同、梅曾亮、方東樹、姚瑩の名を挙げ、師の教えは弟子によって各地に伝えられたとする。彼らは「姚門」と呼ばれ、桐城派の成立に中心的な役割を果たしたとされるが、同じ姚門に属しても、それぞれの弟子の意識には差が見られる。そこで、今回は姚瑩の交遊に注目し、彼の所属意識について考えていく。考察を通して、姚門および桐城派がどのような性格を持った集団なのか、その一端を明らかにしたい。

姚瑩は桐城麻溪姚氏の出身で、姚鼐の姪孫に当たる。字は石甫、号は明叔、展和とも号した。二十四歳で進士になると、平和縣、龍溪縣、臺灣縣、武進縣の知縣などを経て、臺灣兵備道として道光十八年（一八三八）に臺灣に赴任し、アヘン戦争の際には、イギリス船を打ち破り、百人以上を捕虜とする功績を挙げた。しかし、戦後、イギリスはその事件が難破した商船を拿捕したにすぎないと主張すると、姚瑩は功績を偽った罪で獄に繋がれてしまう。これに対し、朝野で擁護する意見が噴出したため、彼は早々に出獄することができた。その後、四川の蓬州知州、廣西按察使などになり、咸豐二年（一八五二）、六十八歳で官に就いたまま世を去っている。

彼は経世を重視し、海外事情にも関心を持っていた。そのため、姚門だけでなく、李兆洛、賀兆齡、林則徐、魏源、龔自珍らとも交遊が

確認できる。広い交遊を通して、彼は複数の集団に所属意識を持つようになっている。こうした意識は実社会でも見られるが、桐城派の形成過程を明らかにするために、姚門の弟子がどのような意識を持っていたか見ておくことは有益である。そこで、本稿では、姚瑩の文章でたびたび使われる「吾黨」に注目して、桐城出身者、姚鼐およびその弟子、再伝の弟子との交遊を分析することで、姚瑩の所属意識を考えていく。

一、桐城における姚瑩

姚瑩は晩年「十幸齋記」（『東溟文後集』卷九）を著し、人生を回顧して自分が恵まれた幸運について論じている。その第一が「人の生まるるに託するところ有り。使し荒裔絶域或ひは僻陋の郷に在らば、則ち蠢然として世を歿へて已むのみ。翁 桐城文物の邦に生まるるは、其の幸ひの一なり（人生有託。使在荒裔絶域或僻陋之郷、則蠢然歿世已耳。翁生桐城文物之邦、其幸一也）」という、桐城に生まれた幸運である。彼は桐城で育ち、同郷の知識人との交遊を通して、桐城出身という自覚を強く持つようになった。そこで、本章では、姚瑩にとって桐城出身という出自が持つ意味を考える。

進士及第以前の姚瑩の交遊については、施立業「姚瑩與桐城經世派的興起」（『清史研究』二〇〇四年二期）に詳しい。その交遊の中心と

なつたのは、「北園讌集詩序」（『東溟外集』卷二）に見られるように、桐城出身者の集まりであった。

嘉慶十一年の間、則ち李海帆、朱歌堂、方植之、馬元伯、左匡叔、徐六襄、張阮林、劉孟塗、吳子方、光聿原、朱魯存有り。此の十數人は、皆な文章道義を以て相ひ取る。余時に年略し少けれども、毎に與に往來して、其の中に觴詠すれば、以爲らく竹林の遊も、以て過ぐる無からんと。戊辰の後、乃ち各おの散じて四方に之けば、閒歲頗る會する者有りと雖も、率ね寥落たるのみ。而も阮林、子方、孟塗相ひ繼いで喪歿し、竹吾も亦た困頓して出遊すれば、至る者益ます鮮し^二。

ここで名が挙がっているのは、李宗傳（海帆）、朱雅（歌堂）、方東樹（植之）、馬瑞辰（元伯）、左朝第（匡叔）、徐璈（六襄）、張聰咸（阮林）、劉開（孟塗）、吳孫珽（子方）、光聰諧（聿原）、朱道文（魯存）および方秉澄（竹吾）である。彼らは、姚瑩より年長か、ほぼ同世代の桐城出身者であった。この時期の交遊を、施氏は「（一）親鄰」「（二）私塾同學」「（三）考場相逢」「（四）世交」「（五）交游中相識」に分類するが、いずれも桐城域内での活動を基盤にしている点で共通するのである。

姚瑩は、彼ら友人との交遊にくりかえし言及しているが、その集まりは「昔者、吾が黨の盛んなるや、嘉慶九年以後に在り（昔者、吾黨之盛也、在嘉慶九年以後）。」（『吳子方遺文序』（『東溟文集』卷二））とあるように、嘉慶九年甲子（一八〇四）から嘉慶十三年戊辰（一八〇八）まで、数年間のことにすぎない。しかし、「祭劉明東文」（『東溟文集』卷六）でも、學問を好み深く思考することについて「心に其の意を知る者は、吾が黨の二三君子之れに近からんことを庶幾ふ（心に

知其意者、吾黨二三君子庶幾近之。）」といい、友人たちが理想に近づくことと研鑽を積んでいることを賞賛している。このグループについては、劉開もまた「贈吳子方序」（『孟塗文集』卷六）で「昔者、吾が黨の人才嘗て盛んなり（昔者、吾黨之人才嘗盛矣。）」と言っている。このように、姚瑩と劉開は、自分たちを「吾黨」といつており、彼らが強い仲間意識を持っていたことがわかるのである。

彼らの活動は、「北園讌集詩序」や劉開「北園記」（『孟塗駢文』卷二）で懐かしんでいるように、酒宴を開き詩を賦すこともあれば、姚瑩「復吳子方書」（『東溟外集』卷二）や徐璈「九日與諸子登龍眠」（『樗亭詩集』卷一）にあるように、龍眠山など郊外へ遠出することもあった。この時には「僕獨り足下と松の根に踞り、宋元明儒及び近代諸公の學術の辨を論ず（僕獨與足下踞松根、論宋元明儒及近代諸公學術之辨。）」（『復吳子方書』）とあるように、姚瑩は吳孫珽と宋明以来の學術について議論している。彼らは酒宴や行樂を通して、互いに詩文や學問の研鑽に励んでいたのである。

こうした活動を通じて、姚瑩らは文章道義の交わりを自任するに至った。劉開もまた「與光栗原庶常書」（『孟塗文集』卷四）で、同じように左朝第、張聰咸、姚瑩の名を挙げ、「夫れ此の數人は、各おの古人を以て砥礪して習俗に甘んぜず。方に其の始め之れ相ひ得るや、德業もて自らを期し、賢豪もて自らを命ずること、津津然として唯だ及ばざるを恐る。相ひ規するに道義を以てし、勉むるに力學を以てす。蓋し徒だ燕游の歡、論說の敏を極むるのみならざらん（夫此數人者、各以古人砥礪而不甘於習俗。方其始之相得也、德業自期、賢豪自命、津津然唯恐不及。相規以道義、而勉以力學。蓋不徒極燕游之歡、論說之敏矣。）」として、自分たちは道義や學問を切磋琢磨しており、單なる娛樂や議論のための集まりではないと言う。姚瑩や劉開の回想には、同郷の友人に対する深い敬意が示され、彼らが文章道義におい

で強く結びついたことを読みとることができる。彼らに対する仲間意識は、姚瑩に桐城出身者として自覚を持たせることになった。その結果、彼は桐城の学術に対する深い愛着を抱くようになったのである。

前稿「方東樹師弟の桐城派形成に果たした役割」(『金城学院大学論集(人文科学編)』第十一巻第二号、二〇一五年)では、方東樹師弟が、桐城三祖を師承の系譜だけで捉えず、「桐城人文」という地域性の枠組みから捉えていたことを論じた。その背後には、当時の京師文壇に対する彼らの違和感が存在する。京師における桐城古文の流行に對抗して、彼らは桐城の学術文化を総合的に捉えようとしたのである。姚瑩の場合も、「十幸齋記」に見られるように、桐城の学術文化を尊重していた。彼のいう「桐城文物之邦」がどのようなものかは、『康輶紀行』巻之八「桐城先輩」に示されている。

吾が桐經學は錢飲光先生澄之より始まり、理學は何省齋先生唐より始まり、博學は方密之先生以智より始まり、古文は方靈臯先生苞及び戴潛夫先生名世より始まり、詩學は齊荅川先生之鸞より始まり、劉海峰先生大櫬より昌んになる。博究すること精深にして、衆妙を兼綜して、一に理學考據文人の習ひ無きに至りては、則ち先の姜塢編修及び惜抱先生にして、實に後學の奉ずる所にして圭臬^た爲るは、異辭無き者なり。今ま方植之東樹の學問文章、體博く思ひ精らかなるは、其れも亦た編修と惜抱先生の後塵たるか。奉じて異域に使ひし、群を離れ居を^{もと}求め、故人を興念するは、其の敬愛の意を記すこと此くの如し^{三〇}。

彼は晩年に流離しているあいだに、この記事を執筆している。ここでは、さまざまな学術分野における桐城の伝統を記すが、特に注意すべきは、桐城三祖の位置づけである。姚瑩は、方苞を古文に、劉大櫬

を詩学に、姚範と姚鼐を博学兼綜に分けており、古文だけに限定していない。彼らを桐城の学術全体から捉えようとする^{三一}ことで、方東樹師弟の「桐城人文」と同じような立場を表明している。ここでは、方東樹を姚範、姚鼐の継承者と認めており、同郷の友人に対する敬意と桐城の伝統への尊重が、姚瑩のなかで結びついていたことが読みとれるのである。

本章では、進士及第以前における姚瑩の交遊について見てきた。当時の友人は、世代の差こそあったものの、強い仲間意識で結ばれていた。その仲間意識を示すのが、「吾黨」ということばである。姚瑩は彼らに対する敬意を終生持ち続け、その結果、彼は桐城出身としての自覚を強め、桐城の学術文化を尊重するようになったのである。一方で、二十歳前後から、姚瑩は桐城だけにとどまらず、活動範囲を江南へと拡大し、姚鼐の教えを直接受けるようになった。そこで、次章では姚鼐との関係を見ていくことにする。

二、姚瑩と姚鼐

先に見たように、曾國藩は、姚瑩を姚門の高弟の一人としている。ただし、彼は単なる弟子というだけでなく、同じ麻溪姚氏に属す姚鼐の姪孫でもあった。彼が強い同族意識を持っていたことは、前章の「桐城先輩」において、姚範と姚鼐を特別扱いしていることからわかる。この同族意識は、姚鼐との師弟関係にも反映することになった。そこで、本章では麻溪姚氏という観点から、二人の関係を見ていくことにする。

姚鼐は四十代半ばまで官僚生活を送り、官は刑部郎中に至った。『四庫全書』の編纂に際しては、纂修官も務めており、当時における名士の一人である。しかし、乾隆四十年(二七七五)、彼は官を辞し

て帰郷する。その翌年には、揚州の朱孝純の招きに応じて、梅花書院の山長となった。これ以降、彼は安慶の敬敷書院、歙縣の紫陽書院、南京の鍾山書院などの山長を歴任し、書院において四十年ものあいだ学問文章を講じた。江南を訪れる後進は、その名声を慕って彼に教えを求めた。その結果、多くの弟子が姚鼐に師事するようになり、姚門という集団が形成されたのである。

姚鼐も科挙受験に際して、姚鼐のもとを訪れ、書院に滞在している。まず、嘉慶十年（一八〇五）に安慶府學附生に補せられたが、この時には姚鼐から援助があつて受験できている。姚濬昌が記した「年譜」（『中復堂全集』増録）によれば、この翌年には「惜抱先生 敬敷書院に講ずることを主る。府君歲試にて院中に居れば、先生與に學問文章の事を言ひて、始めて其の要歸を得て之れを爲むること益ます力む（惜抱先生主講敬敷書院。府君歲試居院中、先生與言學問文章之事、始得其要歸而爲之益力）。」として、姚鼐から本格的に教えを受けるようになったとされる。その後、嘉慶十二年（一八〇七）には、郷試を受けるため南京に赴くが、その時も鍾山書院に滞在しており、引き続き姚鼐から教えを受ける機会があつた。しかし、その翌年、彼は會試を受けるため、江南を離れて京師に向かったのである。

科挙に関しては、姚鼐は極めて順調な経歴を持つている。彼は二十二歳で童試に、二十三歳で郷試に合格し、そして嘉慶十三年（一八〇八）には、第三十二名で進士及第を果たした。もちろんその能力が評価されたからであるが、前出「十幸齋記」では、自らも「制擧の文を爲るを好まざるも、然れども一たび再び童試にて、遂に郡庠に入る。一たび郷に試みられて擧げらるることを得。一たび禮部に試みられて進士と成るは、其の幸ひの三なり（不好爲制擧之文、然一再童試、遂入郡庠。一試於郷而得擧。一試禮部而成進士、其幸三也）。」というように、運にも恵まれていた。しかし、この進士及第によって、姚鼐の

教えを受ける機会は、少なくなってしまう。進士及第直後に彼は南京を訪ねているが、それ以後は、廣東を中心に数年間の幕僚生活を送ることになる。嘉慶二十年（一八一五）に、最後に鍾山書院の姚鼐を訪ねているが、秋には京師でその計報に接したのである。

姚鼐の経歴を見ると、姚鼐の傍らに侍した期間は、それほど長くない。そのため、林崗「姚門四弟子考」（『文學遺産』一九八五年二期）は、姚鼐からの影響を認めるものの、姚鼐は弟子の礼を執っていないとする。しかし、その門人の徐子苓は「誥授通議大夫廣西按察使司按察使姚公墓志銘」で「少くして其の從祖の姫傳先生に學ぶ（少學於其從祖姫傳先生）。」（『中復堂全集』増録）といい、劉聲木「桐城文學淵源考」卷四や『清史稿』卷三百八十四でも、姚鼐に師事したと明言している。曾國藩も高弟の一人としており、姚鼐は周囲から弟子と見なされていたとすることが出来る。その点では、姚鼐もまた姚門の一人に数えることができるのである。

彼は姚鼐から受けた教えには、書簡を通じた指導も多く見られる。例えば、「汝 論する所の吾が文字、大體之れを得たり。汝 自ら爲る所の詩文、但だ是れ寫し出だすを得るのみ、精實なるは則ち未だし。然れども此れ急ぎ求むべからずして、深く讀み久しく爲れば、自ら悟入すること有らん（汝所論吾文字、大體得之。汝所自爲詩文、但是寫得出耳、精實則未。然此不可急求、深讀久爲、自有悟入）。」（『與石甫姪孫之一』（『惜抱軒尺牘』卷八））という書簡では、姚鼐は自らの作品に対する意見を妥当としながらも、姚鼐の詩文がまだ精確充実したものとは言えないとする。姚鼐と姚鼐は、互いの詩文に対して遠慮なく意見を交わしており、単なる師弟というだけでなく、同族という親密さがその指導にも表れているのである。

その詩文に対する姚鼐の指導は、懇切丁寧なものであつた。例えば、「與石甫姪孫之四」（『惜抱軒尺牘』卷八）では「汝の詩文流暢能

達なるは、是れ其の佳き處なり。而れども盤鬱沈厚の力、澹遠高妙の韻、環麗奇偉の觀は、則ち皆な能はざる所なり。故に長篇は尚ほ可なるも、短章は則ち味はひ無し。更に久しく之れを爲れば、當に進歩有るべきのみ（汝詩文流暢能達、是其佳處。而盤鬱沈厚之力、澹遠高妙之韻、環麗奇偉之觀、則皆所不能。故長篇尚可、短章則無味矣。更久爲之、當有進歩耳。）^四 といひ、姚鼐はその詩文が流暢達意であることとを評價するものの、沈鬱、高遠、奇麗の境地は表現できていないとする。そのため、長篇はともかく、短編は無味乾燥なものになってしまふので、さらに精進するよう励ましている。これらの書簡からは、姚鼐がくりかえし詩文を送って指導を求め、姚鼐もそれに答えていたことがわかる。林氏の前掲論文がいうように、二人には師弟の名分は確認できなくても、姚鼐はほかの弟子以上に細やかな指導をしており、二人のあいだには師弟の実が認められるのである。

姚鼐に対する指導は、詩文の批評にとどまらない。二人には、同族として共通する関心があった。それは姚範の著作を刊行することである。彼は姚鼐の伯父で、姚鼐の曾祖父であり、生前から博覧強記で知られ、学問文章にも優れていた。官は翰林院編修まで至ったが、その著書は死後も刊行されなかった。姚鼐はそのことを惜しみ、姚鼐に『援鶚堂筆記』と『援鶚堂詩文集』を刊行するよう命じた。『援鶚堂集後敘』（『東溟文集』巻二）によれば、それは嘉慶十三年のことである。『惜抱軒尺牘』巻八の姚鼐宛ての書簡のうち、九首中四首でその刊行に触れている^四。ここから、姚鼐が刊行の進捗状況を常に気にしており、姚鼐も原稿を送って校正を求めていることがわかる。姚鼐が刊行を命じたのは、その事業が麻溪姚氏の顕彰につながるからである。姚鼐もまた曾祖父の著作刊行を通して、麻溪姚氏としての誇りと先祖顕彰の重要性を、姚鼐から学んだと考えられるのである。

近年、麻溪姚氏に関する研究が進み、この観点から姚鼐を論じる考

察も見られるようになった^五。姚鼐の場合も「通邑の百族、編氓微姓多し。而れども麻溪姚氏に生まれ、代よ名賢有りて、學問文章道義宦績の淵源に自るところ有るは、其の幸ひの二なり（通邑百族、編氓微姓多矣。而生於麻溪姚氏、代有名賢、學問文章道義宦績淵源有自、其幸二也）。」（『十幸齋記』）といひ、麻溪姚氏出身を幸運のひとつとしている。麻溪姚氏は、もともと元末に餘姚から桐城に移り住み、明の中期以降、官僚や学者を輩出し、ついに桐城の望族となった。姚鼐もその一員として誇りを持っていたのである。

この麻溪姚氏の発展は、族譜の編纂によつて確認できる。当時の人々にとって、族譜編纂は先祖顕彰のために必要な活動であった。麻溪姚氏の場合、族譜は道光年間までに五度編まれているが、『桐城麻溪姚氏宗譜』巻首には、姚鼐の「乾隆乙卯修譜舊序」および姚鼐の「道光己亥修譜舊序」を収めている。それぞれの序を見ると、二人が族譜の編纂に大きく関わっていたことが確認できる。姚鼐は煩瑣になりすぎた体例を改め、昔の世表にならつて、横列に官職、生卒を注記し、妻子はその下に記すようにしたと述べている。体例を改めて簡便にすることで、族譜の継承が途絶えないようにしたのである。姚鼐の序によれば、彼が関わった道光族譜は、この姚鼐の改編を踏まえたものとなっている。彼は姚鼐の体例改良の功績を認めつつ、もう一人の編纂者である姚棐の懸念にも配慮している。その懸念とは、族譜の形式では先祖の事蹟を十分に顕彰できないというものである。これに対し、道光族譜では「一年を逾えて譜成るに、僉みなな瑩の撰する所の傳の後に合刻することを議す。敢へて惜抱先生の例を紊みださずして、而も中丞の說に于いて遺憾無ければなり（逾年譜成、僉議瑩所撰傳合刻于後。不敢紊惜抱先生之例、而于中丞之說無遺憾焉）。」^六という改良をおこなった。自らの『姚氏先德傳』を合刻することで、姚鼐と姚棐の編纂意図を両立させたのである。このように、姚鼐と姚鼐とともに族譜編

纂に参加することで、麻溪姚氏の顕彰に深く関わった。このことは、姚範の著作刊行と合わせて、同族意識が二人を強く結びつけていることを示しているのである。

これまで見たように、姚瑩が受けた教えは、麻溪姚氏という同族意識に関わる部分が多く見られる。そのため、彼は姚鼐の教えについて、姚門における師承ではなく、麻溪姚氏の家学としても継承しようとしていた。彼の家学に関する考えは、張總咸に宛てた「與張阮林論家學」（『東溟文集』巻三）に見える。ここでは次のように言う。

僕 家業を承けて經史を治め、詩古文の學を爲^なむること三世なり。從祖の惜抱先生 詩古文を以て海内に鳴れば、學者多く之れを宗とす。獨り先曾祖の學のみ、久しく晦くして章らかならず。一二の鉅公、頗る遺書を見ざるを以て憾みと爲す。良に生平の緒論、各書に散見するも、未だ譌録するに及ばざるの故に由るなり^六。

彼は三代にわたる家業の継承として、經史を学び、詩文執筆に励んだという。「三代」という表現が意識するのは、姚範と姚鼐の教えである。二人に対する世間の評価は、大きく異なる。ただし、姚瑩にとっては、どちらも大切な家学であり、継承すべきものであった。だからこそ姚範の成果を世間に広めるため、その著作を刊行しなければならぬと考えたのである。この書簡では、姚範の國史での立伝をめざして、姚鼐と姚瑩がそれぞれ史館に働きかけていたことも記されている。先祖の顕彰は、麻溪姚氏として共通する使命となっていたのである。このように、二人にとっては、家学は先祖の顕彰と深く結びついていたと言えることができる。

ほかに、「與姚春木書」（『東溟文後集』巻六）では「瑩 家學を

負荷すること能はざる似^{ごと}く無きも、惜翁の文章に即きては、亦た百の一を仰承すること能はず。幸ひにして足下の異之、仲倫、生甫及び惜翁門下の諸君子との其の言を昌大するに頼りて、文章をして軌を正しからしめば、久しくして益ます昭明たり。盛んなりと謂ふべし（瑩無似不能負荷家學、即惜翁文章、亦不能仰承百一。幸賴足下與異之、仲倫、生甫及惜翁門下諸君子昌大其言、俾文章正軌、久益昭明。可謂盛矣）。」^一といつて、自らの家学に言及している。彼は家学を担うことはできても、姚鼐の文章を百分の一も継承できないとした上で、その文章は姚椿、管同、吳德旋、毛嶽生をはじめとする姚門の弟子によって明らかになったとする。姚鼐の教えは、彼にとつては家学である。ここでは、自らの家学と姚門の継承を対比させることで、彼にとつて姚鼐の教えが、ほかの弟子とは意味合いが違ふことを示そうとしたのである。

本章では、麻溪姚氏という観点から、姚鼐との関係を見てきた。姚瑩は自らの出自に強い誇りを持っており、姚鼐に対しては、それが同族意識として表れた。実際、彼が受けた指導は、ほかの弟子に対する教えと異なる部分を含んでおり、姚鼐もまた身内に対する指導としておこなっていたことがわかる。もともと姚門はさまざまな出自の弟子が集まって形成されており、均一性の高い集団とはいえない。その中で、姚瑩は特別な地位を与えられたのである。そこで、次章では、彼の姚門に対する意識について見ていくことにする。

三、姚門における姚瑩

これまで見てきたように、姚瑩は、同郷の友人に対しては桐城出身としての同郷意識を、姚鼐に対しては麻溪姚氏としての同族意識を持っていた。いずれも出自に関わる所属意識である。一方、姚門の場

合、すべての弟子に共通するのは、姚鼐への師事という点だけである。弟子たちは同門意識で結ばれるものの、世代も師事した時期も違っており、互いの交遊にも親疎が見られる。そこで、本章では、姚鼐と姚門の弟子との交遊を見ることで、姚門がどのような性格を持った集団なのか考えていく。

前章で見たように、姚鼐は自らを姚鼐の同族であり、ほかの弟子と異なるという意識を持っていた。そのことは、姚門の弟子も認めていたようである。姚鼐の死後、姚鼐は陳用光からその行状を執筆するよう依頼された。その際には「吾が師 德行文章を以て後學の師表爲る者、四十餘年所なれば、當に之れを史館に上るべし。其の生平出處、言行の大、綴りて之れを狀するは、弟子の責なり。子は先生の屬に於いて最も親しければ、曷ぞ其の略を條べん（吾師以德行文章爲後學師表者、四十餘年所、當上之史館。其生平出處、言行之大、綴而狀之、弟子之責也。子於先生屬最親、曷條其略）。」（『朝議大夫刑部郎中加四品銜從祖惜抱先生行狀』（『東溟文集』卷六））とされている。ここでは、行状の執筆は弟子の責任とされており、陳用光は姚鼐も弟子の一人と見なしている。一方で、彼を最も近い親族とも言っており、その立場の特殊性を反映した依頼となっている。陳用光は彼より十六歳年長で、姚門の弟子における中心的な存在である。並み居る高弟のなかで、彼からこのような依頼を受けたのは、姚鼐が姚門で一目置かれ、特別な地位にいたことを示しているのである。

ひとくちに姚門といっても、その弟子はいくつかのグループに分類できる。姚鼐は『姚氏先德傳』卷四「惜抱公」において、主だった弟子の名を挙げている。

公講ずるを主ること數十年、從ひて學を受くる所の門弟子 名を知らるるもの甚だ衆し。其の尤も著はるる者は、上元の管同、宣

城の梅曾亮、同邑の方東樹、劉開にして、前の工部侍郎歙縣の鮑桂星、今まの禮部左侍郎新城の陳用光、安徽巡撫の鄧廷楨、最も顯達爲り。私淑して弟子を稱する者に至りては、則ち宜興の吳德旋、華亭の姚椿、寶山の毛嶽生、同邑の張聰咸、皆な文學著述を以て名を稱せらる。其の會試にて得る所の士は、則ち左都御使涪州の周興岱、通政使昆明の錢澧、檢討曲阜の孔廣森最も著はる。

ここでは、姚鼐の弟子を受業と私淑、さらに科挙の門生に分類している。王達敏『姚鼐與乾嘉學派』（學苑出版社、二〇〇七年）第八章では、乾隆五十四年（一七八九）以降の弟子を、（一）「因欽仰而來歸者」、（二）「因屬鄉邑子弟而被攜入門牆者」、（三）「肄業鍾山書院者」に分ける。また『桐城文學淵源考』では、四十二名の弟子について姚鼐への師事を明言する。このうち、桐城出身者は二十二名であり、ほぼ半数を占める。前出の「北園讌集詩序」に名が見える桐城出身者についても、劉聲木は李宗傳、方東樹、左朝第、徐璈、張聰咸、劉開、光聰諧を姚鼐の弟子としている。ここからは、王氏のいう（二）の桐城出身者が、姚門における弟子の中心となっていたことがうかがえる。第一章で見たように、姚鼐は桐城出身者と文章道義の交わりを結んでいた。そのため、姚門においても、彼は桐城出身者と他郷出身者に対して異なる態度を見せていたようである。

姚鼐と姚門の弟子との交遊は、龔書鐸「姚鼐交游述略」（『北京師範大學學報』一九八二年五期）に見えるが、「姚門四傑」のなかでも、方東樹と劉開に対しては、彼は桐城以来の仲間意識を抱きつづけた。一方、他郷出身者については、前出の「與姚春木書」に「昔嘉慶の中、家の惜翁 鍾山に在りし日、足下數しば從ひて遊び處るも、鼐獨り伏して里門に居る。偶たま江寧に至れば、翁 足下の爲めに、未

だ嘗て善なるを稱せざることあらざるなり。惟だ異之、伯言時に與に往還すること且久しく、最も後れて生甫と交ふことを得（昔嘉慶中、家惜翁在鍾山日、足下數從游處、瑩獨伏居里門。偶至江寧、翁爲足下、未嘗不稱善也。惟異之、伯言時與往還且久、最後得交生甫。）とあるように、姚瑩は郷里にいる期間が長く、鍾山書院の姚鼐のもとを訪ねる機会が少なかった。そのため、他郷出身者との交遊がやや遅かったことがわかる。後に彼は管同や梅曾亮とも親しく交遊することになるが、姚鼐のもとを訪れた当初は、他郷出身者に対して同郷の仲間と同じような交際はしていなかったのである。

それでは、管同との交遊を例に、他郷出身者との関係を見ていくことにする。施立業『姚瑩年譜』（黃山書社、二〇〇四年）は、二人の交遊が嘉慶二十年（一八一五）に始まるとするが、これは姚鼐が逝去する半年前のことである。この時、管同は「送姚石甫序」（『因寄軒文初集』巻五）を執筆し、そのなかで桐城出身者との交遊を述べている。それによれば、管同は劉開と一度会っただけであり、方東樹とのつきあいが特に長いという。さらに、左朝第とはその後知りあい、姚瑩とは今回ようやく会うことができたとしている。また、彼の人となりを颯爽として剛直であると評し、その書は明弁博識であると賞賛している。その上で、管同は「甚しきかな、桐城の多才なるや。然れども石甫殊に自らを足れりとせず、慊然として益を吾が儕に求む。吾が儕之れ陋ければ、奚ぞ能く石甫を益さんや（甚矣、桐城之多才也。然石甫殊不自足、而慊然求益於吾儕。吾儕之陋、奚能益石甫哉。）」といい、自分たちが姚瑩にとって益友として十分な資格がないとする。この「吾儕」は姚門の弟子を指すが、彼は姚瑩との交遊を固辞している。管同が固辞したのは、「石甫 予の爲めに言ふに、吾が郷に同志 十人有り。今まの存する者は五人なるのみと。四人は、植之、明東、匡叔、石甫なり。其の一人は、又た何人ならん。（石甫爲予言、

吾郷同志有十人。今之存者五人而已。四人者、植之、明東、匡叔、石甫也。其一人者、又何人也。）」という、姚瑩の態度がもたらしたものである。ここでいう「同志」は、第一章で見た桐城の友人にほかならず、姚瑩は新たな交遊を結ぶ際にも、彼らを話題にしている。他郷出身者に対して、彼ははじめから桐城出身者の結束の強さを示した。だからこそ、第一章で見た姚瑩の「吾黨」に対して、管同は「吾儕」と自分たちを卑下したのである。このように、姚瑩は桐城出身者に対する仲間意識を基盤として、姚門においても新たな交遊を築こうとしたのである。

「答姚石甫書」（『因寄軒文二集』巻三）には、姚瑩が管同に自分の作品を添削するよう依頼したことが見え、後に二人は親しくつきあうようになった。ただ、初対面のやりとりからは、姚瑩が姚門においても同郷意識を優先していたことがわかる。姚瑩と同じ桐城出身者でも、方東樹の場合は、姚鼐に侍した期間が長く、管同や梅曾亮とも深い交わりを結んでいる。桐城出身者とは他郷出身者が対立した訳ではないが、姚門では桐城出身者が主流を占めており、姚瑩のように、桐城という同郷意識を強く抱いて姚門に加わった場合も多かったと考えられる。このことは、出自に基づく所属意識の差として認められるが、後に上元出身の梅曾亮が京師で活躍するようになると、この意識の差は、姚門内で葛藤を生じさせることになったのである。

本章では、姚門に対する姚瑩の所属意識について見てきた。彼の場合、姚門の弟子に対する同門意識に比べ、桐城出身や麻溪姚氏という出自に関わる所属意識が優先していたことがわかる。こうした態度は、前出「送姚石甫序」に見られるように、管同ら他郷出身者も気づいていた。姚門における同門意識の違いは、姚鼐再伝の弟子に継承されていくうちに、さらに顕在化していくのである。

四、姚瑩と再伝の弟子たち

ここまで姚瑩の所属意識について見てきたが、彼の場合、同郷意識が同門意識に優先する傾向があった。一方で、彼は後に姚鼐再伝の弟子とも交遊を結んでおり、そこで新たな所属意識を抱くことになる。そこで本章では、アヘン戦争後の交遊を見ていくことにする。

前出「歐陽生文集序」では、桐城派が桐城、江西、廣西へ伝播した過程を記している。曾國藩は、桐城の中心を方東樹とし、江西の中心を魯仕驥とその甥の陳用光とするが、廣西については、吳德旋とその友人の呂璜に触れた上で、「月滄の郷人に、臨桂の朱琦伯韓、龍啓瑞翰臣、馬平の王錫振定甫有りて、皆な吳氏、呂氏に步趨して、而も益ます其の術を梅伯言に廣めんことを求む。是れ由り桐城の宗派 廣西に流衍す（月滄之郷人、有臨桂朱琦伯韓、龍啓瑞翰臣、馬平王錫振定甫、皆步趨吳氏、呂氏、而益求廣其術於梅伯言。由是桐城宗派流衍於廣西矣）。」^九という。これは、朱琦らが梅曾亮に教えを受けたことで、廣西に桐城派が伝わった状況を示したものである。柳春蕊『晚清古文研究 以陳用光、梅曾亮、曾國藩、吳汝綸四大古文圈子爲中心』（百花洲文藝出版社、二〇〇七年）第二章では、梅曾亮師弟が姚鼐の後継者と見なされるようになった経緯について分析し、桐城派の形成に彼らが果たした役割を論じている。そこで以下、姚瑩と梅曾亮師弟との交遊に注目してみる。

梅曾亮は、道光十四年（一八三四）に戸部郎中になってから、京師文壇において影響力を発揮し、そのもとには多くの弟子が集まった。「惜抱先生與管異之書跋」（『東溟文後集』卷十）では、彼が姚鼐の後継者として尊敬を集めていた様子を伝える。

獨り伯言 戸部郎官爲ること二十餘年、植品甚だ高く、詩古文の功力與に抗衡する者無く、其の得る所を以て古文を好む者の爲め

に倡導すれば、和する者益ます衆し。是に于いて先生の説益ます大ひに明らかなり。今ま異之往けり。地下に知有れば、能く愉快たる無からんか。伯言の道既に大ひに行なはれども、江寧に告歸す。先生の風是に于いてか在らん^九。

姚瑩は、当時、詩文で梅曾亮に匹敵する者はおらず、彼が積極的に後進を教え導いたことよって、姚鼐の教えが広まったとしている。姚瑩は「再與梅伯言書」（『東溟文後集』卷八）でも「閣下蚤歲、志は有爲に在りて、既にして文章を專功す。惜翁の後、異之往けり。今ま海内の茲の事、閣下を舍いて其れ誰に屬さんや（閣下蚤歲、志在有爲、既而專功文章。惜翁後、異之往矣。今海内茲事、舍閣下其誰屬耶）。」^九として、管同亡き後、梅曾亮以外に姚鼐の教えを継承する者はいないとする。ここからは、彼が梅曾亮を姚門の中心として認めていたことがわかるのである。

ただし、梅曾亮の活躍に対しては、姚門の弟子にも複雑な思いがあったようである。方東樹は「柏硯山房文集後序」（『柏硯山房文續集』卷末）において、梅曾亮の学問文章を賞賛した上で、「此れ固より先師平日力めて追ふ所にして惟だ全ては志の如くならざるを恐るる者なり。吾が黨の二三子、皆な當に舍を避くるべし。千秋の大業、悠悠たる愛憎の口の能く標榜忌疾する所の之れを移す者に非ざるなり（此固先師平日所力追而惟恐不全如志者也。吾黨二三子、皆當避舍。千秋大業、非悠悠愛憎之口所能標榜忌疾移之者也）。」^九といい、彼が姚鼐の果たせなかった志を継承しているとする。ここでいう「吾黨」は姚門の弟子を指し、ほかの弟子は彼を畏敬すべきであるというが、一方で、その功績に対して姚門内で愛憎や妬みがあることも言及している。前稿では、ほかならぬ方東樹師弟が京師文壇に対して対抗意識を持っていたことを明らかにしたが、その際に彼らが抛り所としたの

が桐城出身という出自である。ここからは、姚鼐の死後、高弟および再伝の弟子のあいだでは、必ずしも同門意識で結束していたわけでないことがうかがわれる。姚瑩の場合も、「惜抱先生與管異之書跋」の「伯言之道」というが、この表現からは、新たな梅曾亮の教えという意識が見られる。このように梅曾亮が文壇の領袖になったことで、姚門内における派閥意識が露わになってきたのである。

姚瑩が梅曾亮の弟子たちと知りあうのは、「送余小頗守雅州序」〔『東溟文後集』巻九〕に「道光癸卯、京師に至る。張亨甫に因りて陳頌南、王少鶴を識り、伯言に因りて朱伯韓、邵位西、余小頗、馮魯川を識る（道光癸卯、至京師。因張亨甫識陳頌南、王少鶴、因伯言識朱伯韓、邵位西、余小頗、馮魯川）。」とあるように、道光二十三年（一八四三）のことである。この時、輿論の後押しによって、彼はすでに出獄していたが、張際亮を介して陳慶鏞、王拯と知りあい、梅曾亮を介して朱琦、邵懿辰、余坤一、馮志沂と知りあっている。彼らとの交遊については、龔氏の前掲論文でも言及されるが、彼はアヘン戦争の功労者として世間の注目を浴び、多くの京師の知識人から酒宴に招かれ、交遊を求められた。そのなかでも、彼は特に梅曾亮師弟と深い交わりを結んだのである。

姚瑩の彼らに対する仲間意識は、「與朱伯韓侍御書」〔『東溟文後集』巻八〕で詳しく語られている。

吾兄 上哲の資を以て、特立の操を樹て、文章氣節、一に堅貞を秉りて、友朋生死患難の際に拳拳として、始終 二ならざるは、尤も人の心脾をして感ぜしむるに足る。此を以て益ます必ず國に負かざるを信するなり。乃ち伯言の高文廉傑、力 一時に振るひ、位西の研道醇邃、志 千載に追ひ、海秋の才 古今を拓き、頌南の誠 金石を貫き、賡堂の宏敏任事、子貞の淵懿植行、

湘颿の英爽、鶴田の貞純、少鶴の矯矯たる鋭才、翰臣の恢恢たる抗志の若きは、此れ皆な古へを邁^{すす}ぐるもて期と爲し、其の守を失せず。洵に吾が黨の傑たるものなり。今ま時を同じくするを得るは、豈に幸ひならんや。瑩 里に抵^{いた}りて、老友の方植之、馬元伯、光律原の爲めに之れを言ふも、亦た未だ嘗て神の往かざることあらざるなり⁺。

ここには、朱琦および梅曾亮、邵懿辰、湯鵬、陳慶鏞、蘇廷魁、何紹基、馬沅、呂賢基、王拯、龍啓瑞らとの交遊が記されている。梅曾亮だけは江南以来のつきあいであるが、ほかはアヘン戦争後に京師で新たに交遊を結んだ人々である。彼らは梅曾亮の友人または弟子であり、その多くが京官として官界や文壇で影響力を持っていた。いずれもその出獄に際して尽力した人々である。だからこそ、姚瑩は彼らを「吾黨」と呼び、その一員であることを示していたのである。ただし、この仲間意識は、姚鼐の後継者としての同派意識というより、むしろ官界における同党意識としての側面が強い。しかし、この仲間意識は、彼が梅曾亮らと桐城における姚鼐の後継者を結びつけようとする動機になったのである。

「與朱伯韓侍御書」では、第一章で見た方東樹、馬瑞辰、光聰諸ら桐城出身者についても言及している。姚瑩は方東樹らを「老友」と紹介しており、朱琦がそれまで彼らと深い交遊がなかったことがうかがわれる。そのことは、再伝の弟子に至ると、姚門内の交流が、すでに稀薄になっていたことを示している。だからこそ、姚瑩は同郷の友人に言及することで、双方を紹介したのである。彼は人生において、ふたつの「吾黨」に言及しているが、そのことは、京師と桐城のふたつの文学集団が接触する機会を提供することになったのである。

後に、道光二十七年（一八四七）ごろには、梅曾亮師弟と方東樹と

の交遊が確認できる。方東樹の絵画に寄せて、梅曾亮は「方植之寒崖獨往圖」(『柏硯山房詩集』巻八)を、朱琦は「寄題桐城方植之寒崖獨往圖」(『怡志堂詩初編』巻五)を詠じている。同じ姚門の弟子である梅曾亮だけでなく、その弟子の朱琦も「漢宋の紛争古今自りして、一編の商兌 知音少なし。晩年更に悟りて言旨無く、枯木寒巖獨り此の心(漢宋紛争自古今、一編商兌少知音。晩年更悟無言旨、枯木寒巖獨此心)」として、『漢學商兌』という方東樹の業績に触れ、その晩年の心境に思いをめぐらせている。ただし、京師と桐城では、その交遊はそれほど密なものではなかった¹⁾。このような状況において、姚瑩は仲立ちとなって、接触の機会を提供しようとしたのである。その後も京師と桐城は接触を重ねていく。その結果、姚門は後に曾國藩がいうような桐城派へと発展していくのである。

本章では、梅曾亮師弟との交遊を通して、姚瑩の晩年における所属意識について見てきた。彼は入獄を経験することで、新たな交遊を結ぶことになった。その交遊は姚鼐の教えを受け継ぐ同門意識だけでなく、援助に対する感謝が根底にある。しかしながら、姚瑩が梅曾亮師弟と深く交わることで、京師と桐城におけるふたつの「吾黨」に接触の機会を提供した。このことは、彼らが後に世間から桐城派として認められるひとつの要因となったのである。

おわりに

本稿では、交遊に注目して姚瑩の所属意識を見てきた。彼は姚鼐の同族であることを強く意識し、姚門のなかでも特別な地位を占めるようになった。また、同郷意識を重視することで、特に劉開や方東樹らに対する仲間意識も強く見られる。その交遊は、後に姚門および桐城派へと拡大していくが、桐城出身者との交遊を、姚瑩は新たな友人

に対してもくりかえし紹介している。ここからは、彼が桐城という同郷意識を核として、新たな交遊へと発展させたことがわかるのである。

姚門の弟子は桐城を中心とした江南出身の弟子が多かったが、再伝の弟子に至っては、その出身は各地に広がった。方東樹師弟が京師文壇に対して違和感を持ったことからわかるように、桐城派は強固な仲間意識で結ばれた文学集団でなく、師承などの交遊に基づいた複数グループの総称というべき性格を持っている。今回見たように、姚瑩は方東樹らに対しても、梅曾亮師弟に対しても「吾黨」と呼ぶほど深く関わっていた。朱琦への書簡では、新たな友人に同郷の昔なじみを紹介することで、ふたつのグループを結びつけようとしている。この点で、彼は両者を交流させることで、桐城派として発展する機会を提供したと言えるのである。

これまでは、桐城出身者の視点から桐城派を捉えようとしてきた。一方で、桐城古文の継承は、京師の梅曾亮師弟や江浙の吳德旋、姚椿らによってもおこなわれた。彼らが姚門と桐城派をどのように捉えていたかについては、今後の課題にしたい。

一 本稿では、姚鼐およびその弟子を「姚門」と呼び、「桐城派」については劉聲木『桐城文學淵源考』に基づき、桐城三祖の弟子および私淑の弟子までを含むものとする。

二 「嘉慶十二二年間、則有李海帆、朱歌堂、方植之、馬元伯、左匡叔、徐六襄、張阮林、劉孟塗、吳子方、光聿原、朱魯存。此十數人者、皆以文章道義相取。余時年略少、每與往來、觴詠其中、以爲竹林之遊、無以過也。戊辰後、乃各散之四方、雖間歲頗有會者、率寥落矣已。而阮林、子方、孟塗相繼喪歿、竹吾亦困頓出遊、至者益鮮。」

三 「吾桐經學始於錢飲光先生澄之、理學始於何省齋先生唐、博學始於方密之

先生以智、古文始於方靈臯先生苞及戴潛夫先生名世、詩學始於齊荅川先生之鸞、昌於劉海峰先生大櫬。至於博究精深、兼綜衆妙、一無理學考據文人之習、則先姜塢編修及惜抱先生、實後學所奉爲圭臬、無異辭者也。今方植之東樹學問文章、體博思精、其亦編修與惜抱先生之後塵矣乎。奉使異域、離群索居、興念故人、記其敬愛之意如此。」

四 姚範の著作刊行に関する記述は、「與石甫姪孫之一」、「與石甫姪孫之四」、「與石甫姪孫之五」、「與石甫姪孫之六」に見られる。ここでは、刊行作業の進捗状況を尋ね、刊行費用にも気を配るだけでなく、識語もつき、誤字を指摘した別紙を作っている。

五 麻溪姚氏については、汪孔豐「清代桐城望族藏書及其學術文化影響述論——以麻溪姚氏爲中心」（『池州學院學報』二〇一二年四期）、同「清代桐城麻溪姚氏家族的編輯刊刻及其文化價值」（『河西學院學報』第二十九卷第一期、二〇一三年）などがあり、姚鼐との関連については、卞孝萱、武黎嵩「重新認識姚鼐」《桐城麻溪姚氏宗譜》資料的發掘和利用」（『中國文化』第二十五—二十六期、二〇〇七年）、同「從《桐城麻溪姚氏宗譜》看姚鼐與宋學」（『淮陰師範學院學報（哲學社會科學版）』第三十一卷第一期、二〇〇九年）などがある。

六 「僕承家業治經史、爲詩古文之學三世矣。從祖惜抱先生以詩古文鳴海內、學者多宗之。獨先曾祖之學、久晦不章。一二鉅公、頗以不見遺書爲憾。良由生平緒論、散見各書、未及撰錄故也。」

七 「公主講數十年、所從受學門弟子知名甚衆。其尤著者、上元管同、宣城梅曾亮、同邑方東樹、劉開、而前工部侍郎歙縣鮑桂星、今禮部左侍郎新城陳用光、安徽巡撫鄧廷楨、最爲顯達。至私淑稱弟子者、則宜興吳德旋、華亭姚椿、寶山毛嶽生、同邑張聰咸、皆以文學著述稱名。其會試所得士、則左都御使涪州周興岱、通政使昆明錢澧、檢討曲阜孔廣森最著。」

八 方東樹、管同、梅曾亮の交遊の深さは、「方植之文集序」（『因寄軒文二集』卷四）で管同が「同少き時、性文を爲り海内の文士と往來するを喜

めども、而れども桐城の方君植之もて之れが冠と爲す（同少時、性喜爲文與海内文士往來、而桐城方君植之爲之冠）」といい、「贈陳仰韓序」（『柏硯山房文集』卷三）で梅曾亮が「余文章の士に於いて交はりを得る者は三人なり。管君異之と曰ひ、吳縣の王惠川、桐城の方植之と曰ふ。（余於文章之士得交者三人。曰管君異之、曰吳縣王惠川、桐城方植之）」という記述などからもわかる。

九 「獨伯言爲戶部郎官二十餘年、植品甚高、詩古文功力無與抗衡者、以其所得爲好古文者倡導、和者益衆。于是先生之說益大明。今異之往矣。地下有知、能無愉快乎。伯言之道既大行、告歸江寧。先生之風于是乎在。」

十 「吾兄以上哲之資、樹特立之操、文章氣節、一秉堅貞、而拳拳於友朋生死患難之際、始終不二、尤足感人心脾。以此益信必不負國也。若乃伯言高文廉傑、力振一時、位西研道醇邃、志追千載、海秋之才拓古今、頌南之誠貫金石、賡堂之宏敏任事、子貞之淵懿植行、湘颺英爽、鶴田貞純、少鶴矯矯而銳才、翰臣恢恢而抗志、此皆邁古爲期、不失其守。洵吾黨之傑也。今得同時豈非幸耶。瑩抵里、爲老友方植之、馬元伯、光律原言之、亦未嘗不神往也。」

十一 前稿「方東樹師弟が桐城派形成に果たした役割」では、梅曾亮師弟と戴鈞衡ら方東樹の弟子とのあいだで交遊が見られることを指摘した。